



▲国立科学博物館

「国立科学博物館大学 パートナースhip」という制度をご存知だろうか。これは、大学生の科学リテラシーやサイエンスコミュニケーションの向上を目的として、平成17年より開始された産学連系事業である。この事業に参画している大学は常設展の入館が無料になるなどの様々な特典があり、本学もこのプログラムに参画している。

現在、国立科学博物館(以下、科博)が公開している常設展の一部である地球館にて、総面積約2300㎡に及ぶ大規模なリニュー

国立科学博物館

～自然と科学の歩み～

アルが行われている。リニューアルの目的は、最新の学説や社会動向の反映、科学との対話の場の提供である。

地球館では、地下3階から地上3階にわたって展示を行っており、地下3階には宇宙・物質・法則と科博の活動内容の展示がある。このうち科博の活動のコーナーは改修中であり、リニューアル後は、自然科学系ノーベル賞受賞者を一同展示、2008年に小林誠、益川敏英両氏がノーベル物理学賞を受賞した理由となった小林・益川理論の実証、高エネルギー加速器研究機構が所蔵する加速器の中心部分の実物展示を行うなど、自然科学の仕組みに迫る展示となる。

地下2階では地球環境の変化と生物の進化の展示を行っている。ここでは生物の誕生と絶滅に注目し、地球の起源から、カンブリア時代の生物、哺乳類、爬虫類、鳥類、そして人類の出現までの生物の進化の歴史を地球環境の変化とともに追う。地下1階は、これまでほぼ全面が特別展のフロアとなっていたが、改修後は、一部が常設展となり地下2階と同一のテーマで恐竜だけをクローズアップした展示となる。見所はやはりティラノサウルスとトリケラトプスの対峙であろう。迫力満点の展示を臨みながら恐竜の謎を探る。地上1階は、地球の生物の多様性フロアであり多様性の由来や、自然を生き抜くための生物の工夫、生物の系統図による展示がある。改修後はここに宇宙の誕生から科学技術までを物語る地球史ナビゲータや、多様性保全コーナーなどが加わる。地上2階では、科学と技術の歩みのフロアとなっており、日本の歴史とともに発展してきた科学技術と、それを支えた様々な装置の展示を行っている。リニューアル後は、富士山レーダーのマグネトロン、地球の今が分かる観測ステーション、地球磁場逆転期を含む地層の実物標本、体験型展示を行う予定である。地上3階には大型獣やサバンナの哺乳類などの集合展示があり、改修後は親子の探検広場として親子で楽しめる体験型展示などが現れる。中でも子どもティラノサウルスの骨格復元展示は世界初である。

このように、改修後は自然と科学技術との関わりが強調され、最新の学説や体験を盛り込んだ展示は科学や自然との対話を促すものとなる。今回のリニューアルを機に、大学パートナーシップを利用して科博に足を運んでみてはいかがだろうか。



みなさんは、『光の帝国II』という絵を見てどのような感想を持つだろうか。よくよく、しっかりとこの絵を観察してみよう。何か、違和感を感じないだろうか。この絵は、我々の現実ではありえない世界が描かれているのである。昼と夜がこの絵の中

に混在している。昼と夜という決して、相容れないもの同士を、さも当たり前のように配置している。このように、現実の世界ではありえないもの同士を同居させるような手法「depaysement」がシュルレアリスムではよく用いられる。この絵の作者であるルネ・マグリットもそのような手法を好んで使用していた。

ここで少しシュルレアリスムとは何かということに触れておこう。シュルレアリスムは、20世紀初頭から出現してきた芸術の世界のひとつの大きな潮流である。この絵やマルセル・デュシャンの『泉』―デュシャンはこの作品で、既製品(Ready-made)の男子用小便器を『泉』と題し展覧会に出品した―のよう

な、一見、奇妙な芸術作品を多く生み出している。これらシュルレアリスムの作品は、現在の芸術分野だけではなく、広告分野等にも大きな影響を及ぼしている。しかし、シュルレアリスムの本質はどのような奇さではない。シュルレア

手話サークル S S L

本学に手話サークル「SSL」があることはご存知だろうか。SSLとは、Science Sign Languageの略だ。SSLは神楽坂キャンパスを拠点とし、一部は金曜日の18時から、二部は火曜日と水曜日の21時から活動している。また、葛飾キャンパスでは姉妹サークルの「サインデイズ」が水曜日と金曜日の18時から活動している。

SSLは他大学の手話サークルや社会人の方々の交流が盛んだ。普段の活動内容は、手の形を文字言語に対応させた視覚言語の指文字や手話の勉強、それからジェスチャーを取り入れたゲームをすることだ。大学に入ってから手話を始めた人も多く所属しており、先輩後輩の垣根をこえて、ゲームをしながら楽しく手話を覚えることができる。他大学の生徒と交流できる拡大交流会も定期的に各大学で開催され、サークルメンバーの多くはこれに参加する。拡大交流会には火曜日と水曜日の21時から活動している。また、現在、手話は私たちの生活の様々な場面で見かけることがある。例えば、選挙期間中にニュースなどで放送される政見放送だ。また、皇室関係の方が手話を学ばれていることもニュースで話題になったことがある。また、気になった方は以下のアドレスにメールを送ってみよう。



▲手話サークル「SSL」メンバー

活の様々な場面で見かけることがある。例えば、選挙期間中にニュースなどで放送される政見放送だ。また、皇室関係の方が手話を学ばれていることもニュースで話題になったことがある。また、気になった方は以下のアドレスにメールを送ってみよう。

生物研究部

東京理科大学一部研究会生物研究部、通称「一部生物研」は1949年創部であり、本学の中でも有数の歴史ある部だ。現在は男子15人、女子5人、計20人で活動している。本学に生物学科がないため部員たちは、基本的に生き物が好きという理由で入部しているという。学年だけでなく学部全体で交流を大事にしており、全体的に和やかな雰囲気だ。部室では魚やザリガニ、カニなどを飼育して

いる。魚たちは定期的に種類を変えているため、自分たちが飼いたい生き物を飼えるのが魅力的だ。主な活動は魚などの飼育だが、親睦を深めるための食事会やイベントなども行っており、交流の場が多く設けられている。食事会やイベントは月に一回程度で行われている。食事会は夕方頃に集合し近況などを話し合っているようだが、酒を飲むことはなく夕飯を共にしているだけのようだ。飲み会ではなく、食事会というところが部のまとまりとした雰囲気を出しているのだ。もちろん、発案すれば飲み会も行うとのことだ。もう一つの親睦を深める場であるイベントは、基本的には遊びに行くことだ。今まではエビ採りやカブトムシ採り、他にも水族館や動物園にも行ったようだ。中でも水族館に行く機会が多く品川水族館や葛西臨海水族館などへ行ったそう。生き物が好きな人

たちと行くことは、友人といくとときと違った楽しさがあることだろう。また、現在は理大祭などの学内行事に参加していないが、今後参加するかどうかは現在検討中だ。



▲生物研で飼育されてるザリガニ